

福山市神辺町所在

御領遺跡（第7次調査）

—遺跡見学会資料—

日時：平成25年11月30日（土）13:30～

主催：公益財団法人広島県教育事業団
福山市教育委員会

1 はじめに

御領遺跡は、福山市神辺町の下御領から上御領にかけて、東西約1.6km、南北約1.4kmの範囲に広がる県内でも屈指の面積を持つ縄文時代後期～中世にかけての遺跡です。遺跡の北西には備後国分寺があり、古代では山陽道が通過している場所でした。

周辺の遺跡としては西側に堂々川を挟んで大宮遺跡、さらに西側には亀山遺跡があります。また、平野の南北両側の山塊には古墳群が多数存在しています。

御領遺跡では、昭和53～54（1978～79）年にかけて実施された国鉄井原線建設に伴う発掘調査をはじめ、30年以上にわたって断続的に発掘調査が行われています。

国道313号道路改良事業に伴う御領遺跡の発掘調査は、平成20年から実施し、今年度で6年目の調査になります。今回の第7次調査は、今年4月から7月にかけて行った第6次調査区と昨年行った第5次調査区に挟まれた地区の発掘調査を行いました。調査期間は、8月～1月中旬の予定です。



2 既往の調査

国道313号道路改良事業に伴う第1～5次調査の成果について少しまとめておきます。

第1次調査 竪穴住居跡1軒、竪穴住居状遺構6基、掘立柱建物跡4棟、土坑3基、多数のピット、自然流路など縄文時代晩期～古墳時代前半頃の遺構を確認しています。古墳時代の竪穴住居状遺構から多くの高杯や小形の丸底壺、滑石製の双孔円盤、土玉、土製管玉などが出土しており、何らかの祭祀にかかわる遺構と推測されます。

第2次調査 竪穴住居跡35軒、掘立柱建物跡16棟、土坑87基、溝状遺構7条、性格不明遺構15を確認しています。これらの遺構は縄文時代後期～晩期と弥生時代後期～古墳時代の2時期に大きく分かれます。縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡や埋甕を検出しました。弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡や中期後半から後期にかけての大溝を確認しました。

第3次調査 溝状遺構5条と土坑3基など弥生時代～古墳時代の遺構を確認しています。このうち、第2次調査で調査した大溝の続きの溝状遺構も確認したほか、止水施設と考えられる大量の木材や突き刺さった杭が出土した溝状遺構も確認しました。また、井戸と考えられる土坑があります。

第4次調査 竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡7棟、土坑14基、溝状遺構11条、自然流路1条、多数のピットを確認しています。竪穴住居跡は主に弥生時代後期頃と古墳時代後期頃のもので、掘立柱建物跡のうち古代前半頃の5棟は調査区の南東寄りにあり、建物の向きがほぼ東西南北に平行する建物群です。土坑のなかで円形のは、弥生時代から古墳時代の井戸の可能性があり、溝状遺構には弥生時代中期頃のものや弥生時代末～古墳時代初頭頃の土器類が多量に出土するものがありました。自然流路は、幅約15m、検出面からの深さ約1.3mの規模で、縄文時代～古代前半の遺物が多く出土しています。

第5次調査 竪穴住居跡3軒、溝状遺構2条、土坑14基、性格不明遺構8のほか多くのピットを確認しています。竪穴住居跡は弥生時代中期と古墳時代前半頃のもので、溝状遺構は古墳時代前半期のもので、第4次調査でも確認されています。土坑のうち円形状のものは古墳時代前半期で、第4次調査でも同時期の建物群が確認されています。このように第5次調査区から第4次調査区にかけて弥生時代から古代前半の集落が広がっていたと考えられ、また、本調査区周辺は御領遺跡の中でも遺構が密集する地点の一つと考えられます。

第6次調査 溝状遺構1条、土坑2基のほか多くの土取跡を確認しています。溝状遺構(SD1)は調査区のほぼ中央部を東西に横切っています。現状で確認できた長さは約20m、幅は場所によって少し違いますが約2m、深さは約40cmで、東側が西側に比べて溝の底が低いことから、西から東に向けて流れていたと思われます。溝の中からは弥生時代前期末頃から弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の土器を中心に土製品(分銅形土製品、紡錘車?)、石器(スクレイパー、石鏃、石錘、石錐、ハンマートーン、石包丁)などが出土しています。土坑(SX1・2)は幅約1.5mの不整形をしています、深さは1m以上で土坑内部からは弥生時代後期の土器が出土しており、井戸の可能性があり、

3 調査の概要

第7次調査の区域は、道路によって3か所に分かれていて、南側からA区、B区、C区と区分して調査を行いました。調査面積は2,389㎡です。

調査に際しては、A・B区では福山市教育委員会の試掘で2面の遺構面が確認されていて、耕作土・床土の直下にある遺物包含層の上下2面で遺構検出を行いました。なお、C区では遺物包含層は確認されず1面のみの調査を行いました。

各調査区で検出した遺構や出土した遺物の概要は次のとおりです。

【A区】

〔上層〕

多数の土坑、溝、ピット等を確認しました。

ピットのうち径0.6m以上のものは古代の掘立柱建物跡と考えられ、現在7棟が想定されています。いずれも調査区西側に集中していて、うち6棟は主軸が東西・南北に沿っています。方角を強く意識して建物の向きをそろえて建てたものと考えられます。土坑のうち、SK3は直径約2m、深さ1.4m以上の井戸です。埋土中からは奈良時代後半頃の須恵器や土師器のほか円面硯が出土しています。溝のうち、SD2は幅約2m、深さ約0.1mで上からみるとT字形をしています。埋土中から奈良時代後半から平安時代にかけての須恵器等のほか、北宋銭（元豊通宝〔1078年始鑄〕・聖宋元宝〔1101年始鑄〕）が出土しています。溝の底面からはピットが確認されていることから、上層遺構面のピット群の埋没時期を示す資料とみることができそうです。すなわち、掘立柱建物が廃絶した後この溝がつくられ、さらにこの溝が埋まったのは北宋銭が示す12世紀前半ごろということから、今回確認された古代の遺構は、遅くとも12世紀前半には姿を消していたことがわかります。

〔遺物包含層〕

厚さ0.1～0.3mの黒褐色土で、弥生土器（後期）、土師器（古墳時代前期・後期、奈良時代後期）、須恵器（古墳時代後期、奈良時代後期）、石器（打製石斧、磨製石斧、石包丁、石鎌）等を含んでいます。

〔下層〕

土坑、ピット等を確認しました。

多数のピットのうち、いくつかは上層遺構面に属すると考えられるものがあり、今後の精査が必要です。建物跡に復元できるものは現時点ではなく、何のために掘られたものかはわかりません。時期は弥生時代～古墳時代と推定されます。

【B区】

〔上層〕

南半で数基のピットを確認しましたが、建物跡に復元できるものはありません。

〔遺物包含層〕

南端では厚さ0.1mの黒褐色土、中央から北にかけては厚さ0.1～0.2m暗褐色土で、弥生土器と古墳時代の須恵器が出土しましたが、古代の遺物は出土していません。

〔下層〕

遺構の分布は、南側では土坑、ピット等が散在的にみられますが、中央から北にかけての範囲では竪穴住居跡、土坑、ピット等が集中している状況を確認しました。

竪穴住居跡は9軒（SB3～11）で、主に調査区北西に集中しています。竪穴住居跡をつくるにあたって、いつも同じ場所が選ばれていたようで、3軒は重なっており、その他の竪穴住居跡もかなり隣接してつくられています。時期は不明なものがありますが、弥生時代後期4軒、古墳時代後期1軒等が確認できます。SB3・4からは多量の焼土・炭化物が確認されており、焼失住居と考えられます。竪穴住居跡群の南側には4基の墳墓と考えられる土坑を確認しています。いずれも出土遺物から、弥生時代後期につくられたものです。竪穴住居跡群の周辺には多量の土器を廃棄した土坑が多数見つかっています。弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと思われませんが、中でもSK37は直径約3mの円形の土坑、SK40は約4×2mの楕円形の土坑で、いずれも多量の土器が廃棄されています。時期は弥生時代後期と考えられます。

〔C区〕

竪穴住居跡、土坑、溝、ピットを確認しました。

溝は弥生時代後期（SD13）、古墳時代後期（SD15・16）のものがあり、いずれも幅0.5～1.0m、深さ0.1～0.2mで、東西・南北方向に伸びています。

竪穴住居跡は5軒確認されており、うち2軒は古墳時代後期の溝に切られています。

なお、C区からは古代の遺物は数点出土しているのみで、弥生時代後期・古墳時代後期の遺物が多く出土しています。

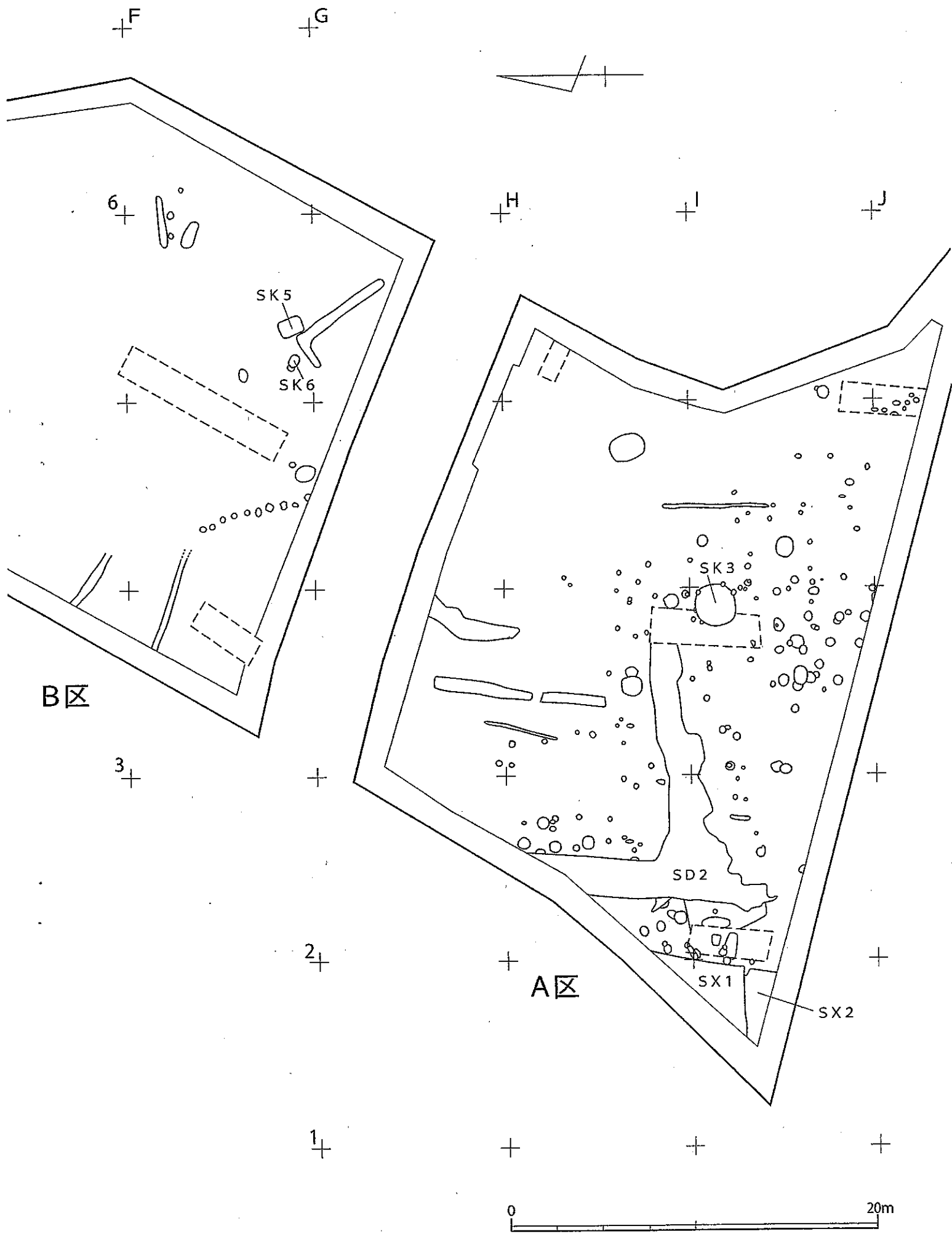
4 まとめ

今回の調査では、南半（A区）と北半（B・C区）では遺構・遺物の様相が大きく異なっており、南半では奈良時代後半から平安時代にかけての遺構・遺物が多く、北半では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺構・遺物が集中して確認されました。

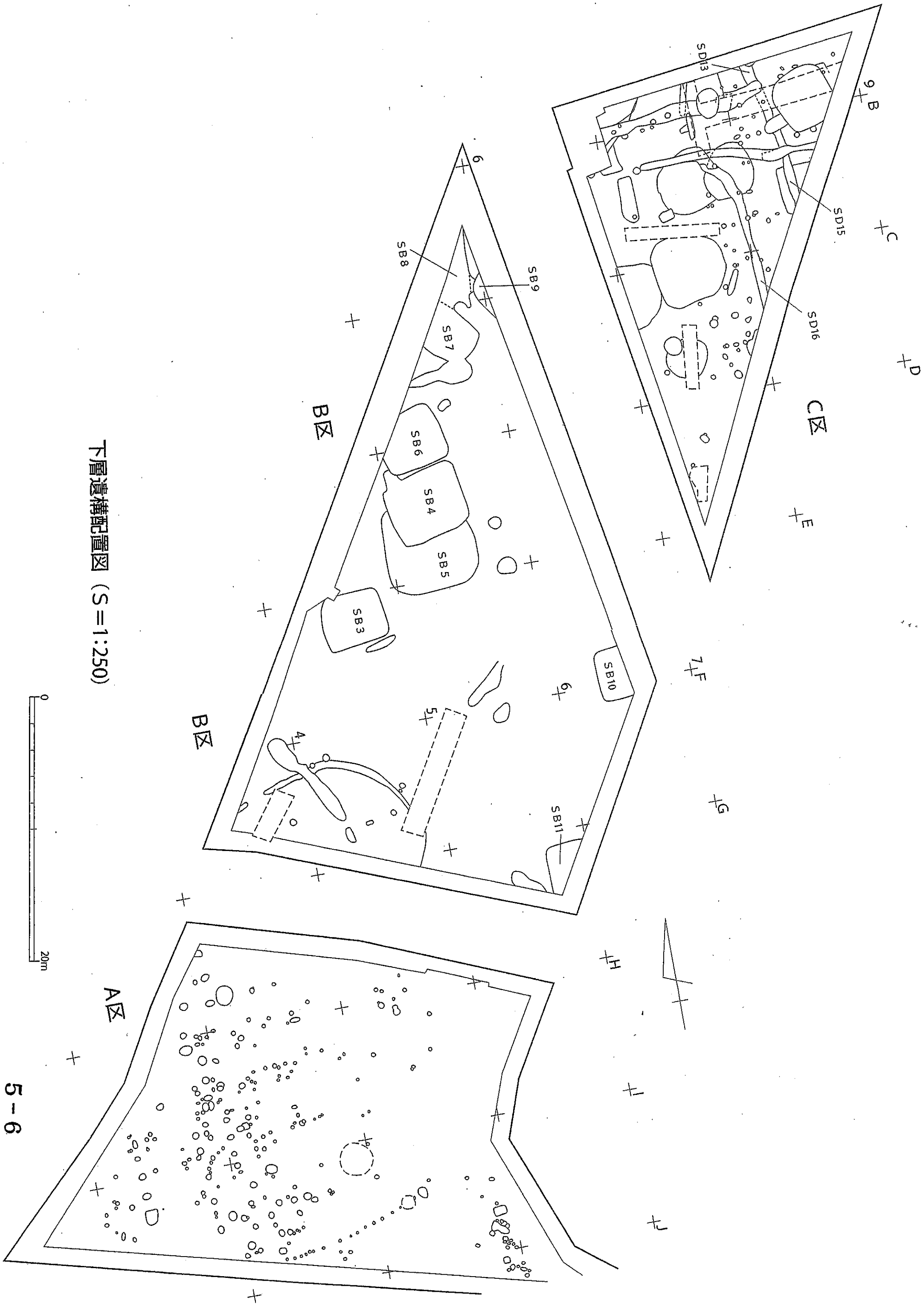
北半では弥生時代から古墳時代の集落の拠点であることがわかり、北側約100mの位置にある第6次調査区の溝と今回確認された集落との関係が今後の検討課題となります。また南に約50～60m離れた第4・5次調査区でも当該期の竪穴住居跡が数多く確認されており、それらとの関係も考えていく必要があります。

南半の古代の遺構については、掘立柱建物跡の主軸が東西・南北に沿っている状況が、本調査区の南側に位置する第4次調査で確認されたものと似ており、同一時期の遺構の可能性があり、広く古代の施設が広がっていた可能性があります。また、これらの掘立柱建物跡は、円面硯が出土していることから、庶民の住まいというよりは役所などの公的機関であった可能性もあります。

なお、C区の北に隣接する東西方向の道路は、古代山陽道の可能性が推定されていますが、前述のとおり、古代の遺物は南半でしか出土しておらず、B区では未出土、C区では奈良時代後半の須恵器が数点しか出土していません。今回の調査では、古代山陽道の手がかりは確認することができませんでした。



上層遺構配置図(A区・B区南半部) (S=1:250)



下層遺構配置図 (S=1:250)